

山村嘉己先生の古希をお祝いして

本 田 忠 雄

陽気で賑やかな雰囲気を好まれる山村先生の周囲には、いつも何人かの人が集まり、先生を中心に話が弾んでいるように思える。私も自然とそんな仲間に入れていただくようになってから、既に30年近い年月が過ぎ去ろうとしている。思い起こせばこの間にいろいろなことがあった。ことあるごとにわれわれは先生とともに盃を酌み交わし、時間の経つのも忘れて論議をし、ある時は歓喜し、ある時は憤慨し、また時には共に楽しく歌ったり、麻雀やテニスに興じたこともある。先生の魅力はひと口に言って、考え方の如何を問わず、誰でも受け入れようとなさる「懐の広さ」であろうか。

先生の研究領域は多種多様なご趣味にも比例し、フランス近代詩を中心に人権問題、女性論など実に広範囲におよぶことは周知のとおりであるが、何事につけ、われわれが世間の常識と信じて疑わないことにも、「果たしてそうであろうか」と検証の精神で取り組まれるのが先生のモットーであるように私には思えるのだ。戦後の大学教育はさまざまな問題に直面し、その蓄積された多くの矛盾が一気に噴出したのが60年代後半からの大学紛争であった。紛争は一応の収束は見たものの、ここ数年来はまた別なる形での難題、すなわち機構改革やカリキュラム改革の嵐が各地の大学で吹き荒れている。わが関西大学も21世紀への生き残りをかけて、更なる改革を模索しつつあるこの時期に、万事に率直に意見を述べられる山村先生が去って行かれることは誠に残念と言うしかない。

人口の高齢化が急速に進行するわが国では、近く介護保険制度が実施されるようであるが、財源やホームヘルパーや高齢者施設の不足など、いわゆる老いの問題がひときわ深刻化しつつある。山村先生は既に四半世紀も前に今日の状況を見抜いておられたのであろうか。Paul TOURNIER : *Apprendre à vieillir* を『老いの意味』と題して翻訳出版されたのは、先

生がまだ40歳代半ばでのお仕事であったと記憶する。作者 TOURNIER は、誰しも引退後のことを40歳代、50歳代から考えておく必要があると力説しているが、計画性のない私などはとても実行できることではない。しかし訳者はさすがで、ご退職後も重要な仕事が既に先生を待ち受けているらしい。つまり先生にとっての退職は引退ではなく、現役続行なのだ。学生時代は剛速球で鳴らした名投手で一度はプロ野球にも進むことを考えられたと聞く。先生が真に引退される時には、学界の名球会入りを果たされるものと期待している。